青年期無気力傾向に関する比較研究[1)]

— 日・韓の大学生を対象に —

教育心理学コース　李　　相　蘭

A Comparative Study of Apathetic Tendency in adolescence
— On College Students in Japan and Korea —

Sanglan LEE

The purpose of this paper is to understand an apathetic tendency of adolescents in Korea, compared with those in Japan. In study, two scales were developed. Apathetic Tendency consisted of Anhedonia, Avoidance & Passivity and Animus Parental Attitudes consisted of Control & Directions, Emphasis of Effort. Two scales were administered to college students in Japan and Korea (in Japan, 201 males and 66 females. in Korea 170 males and 299 females). In addition, five Korean college students (3 females and 2 males) who had showed higher apathetic tendency, were interviewed.

The results were as follows. Firstly, Apathetic Tendency of Korean students appeared higher than Japan. In Korean students, Anhedonia and Avoidance & Passivity in Apathetic Tendency were correlated with Control & Directions which is one of Animus Parental Attitudes of mother. Especially, Avoidance & Passivity in Apathetic Tendency of female was correlated with Control & Directions in Animus Parental Attitudes of mother highly.

Secondly, it was found that in Animus Parental Attitudes, only Contorl & Directions was correlated with Apathetic Tendency. Emphasis of Effort was not correlated with Apathetic Tendency. Lastly, in Korean interviewee who showed higher apathetic tendency did not express withdrawal response such as in Japan. Only the traits which were shown in identity confusion appeared in Korean students.

目　　次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．青年期無気力に関する日本における論点
　A．社会・文化的な背景
　B．発達心理学的な論点
　C．精神病理学的な論点
　D．母親養育態度と無気力
　E．無気力の青年象
Ⅲ．調　査
　A．質問紙調査
　B．面接調査
Ⅳ．考　察
Ⅴ．結　論

Ⅰ．はじめに

近年，青年が示す無気力傾向に関心が高まっている。青年期は，人生の全段階を通して最も活発な時期である。そのような青年期において，意欲や興味のない態度を示す青年が多くみられることは注目すべき問題である。

日本では1970年代頃，青年のモラトリアム現象が問題になっている。モラトリアムとは，留年を繰り返した大学生の行動を指すものであって，日本の青年における無気力現象の初発のようにいわれてきている。その背景は1960年代頃から始まった高度成長による社会・文化的な変化が考えられた（笠原，1977)。ところが，1980年代に入って，さらに進んだ都市化現象，科学技術の飛躍的な

発展や情報化社会への急速な進展は，青年にとってまた質の異なる刺激となったといえる。このような激しい時代的な変化は，例えば，個人の意志とは関係なく人との対人接触の機会を減少させたうえに，溢れる情報に流されような環境をももたらした。そのような状況は，特に自我探索期に入っている青年にとっては，心理的な混乱を引き起こす要因となる可能性がある。

日本で注目される青年の無感動，無関心，無為のような様子は，このような社会・文化的に激しい変化と共に考えられるものとされる（笠原，1977，1983；宮田，1991；竹内，1995など）。

一方，社会・文化の変化プロセスにおいて高い類似性を示してきた韓国において，最近，大学生だけでなく低年齢層を含めて授業場面を中心にした意欲低下が見られつつあり，退却症状や登校拒否という行動が出てしまうケースも増加している。このような現象は韓国青年の内面における混乱が推測される一面といえる。しかしながら，韓国の青年が示す以上のような行動に関連して，その背後にあるものについて具体的な観点から捉えた研究は今のところ見当たらない。

そこで，本研究では韓国の青年に見られる一種の意欲低下を日本社会に見られる青年期の無気力傾向を参考に検討することにする。つまり，本研究は，日本で見られる青年期の無気力傾向が，韓国ではどのような状況になっているのか比較・検証することを通して，最終的に，韓国の青年の示す意欲低下の実体に近づくことを目的とする。

本研究において，無気力傾向とは，物事に無感動，無関心，無為などの性向を来たすもの（稲村，1991）としてとらえる。はじめに，日本と韓国の大学生を対象に無気力傾向を測定する質問紙調査を行ない，両国における無気力傾向の差異および類似点を検討する。次に，質問紙結果を参考にしながら韓国の大学生のみに面接調査を行ない，韓国の青年に見られる意欲低下が日本に見られる無気力傾向の関連からみればどのようなものとして位置づけられるのかを明らかにする。

その際に，現代青年が処している社会・文化的な背景を整理する他に，青年の無気力に関する側面を整理し，得られた結果に関連づけて考察することにする。

Ⅱ．青年期無気力に関する日本における論点

A．社会文化的な背景

1．競争主義

現代社会の競争主義は，青年の心理を考える際に最も大きい要因と考えられる。さらに激化する競争主義は，単に競争のための競争に走りがちになり，それゆえ明瞭な目的意識をもつことの大切さは弱くなる現象を引き起こしたのである。したがって，青年にとってさらに現実的な課題である受験場面においては，子どもの適性や興味を尊重したうえで明確な目標意識が立てられるのではなく，ただ学力増進だけに関心が高まる，歪んだ指導体制を招いたのである。そのような傾向は学校だけでなく親の方にも見られ，目標意識の育っていない，単に偏差値の高い大学だけを求める青年を多く排出してしまうようになった。このように歪んだ競争主義や指導体制は，次第に青年のアイデンティティ混乱に関連する可能性が考えられる。

2．孤立化傾向

現代の家族文化の特徴として，母親の共働きの増加と少子化現象が取り上げられる。このような家族内の変化によって母子の間の接触機会は減り，子ども同士の対人接触機会も少なくすることになった。対人接触の不足のため，最近の子どもには新たな態度が見られるという。例えば，自分が興味のある世界以外にはあまり関心を傾けずに受け身的な様子を示す子が増えつつあるといわれる。さらに，ファミコンの高い普及率にともない，子どもの遊び型に大きな変化が見られ，ますます，孤立化傾向を促す。当然のことながら，機械との接触の増加は人との付き合いを減らし，そのため対人関係に要求される適切なスキルに欠損をもたらす。ファミコンとの接し方は，すでに構造化された指示に従えば，別に人間関係のような気を使わなくてもよいわけである。このため，相手の思いを感じ取る能力や相手に合せる能力だけでなく，相手の前で自己主張をするスキルも不足する。

従って，仮に他者と付き合ったり，集団の中に所属するにしても，期待される共同体感覚より，自己中心的，または自己愛的な様子を示しがちになる。

一方，子どもの孤立化傾向には親の養育態度も影響するところがある。最近の若い母親は子に対して機械的でかつ一方的な接し方をしめす人が多いと言われる。このような接し方は，子ども側に尊重されるという経験を欠如させ，コントロールされるという感覚のみを与える結果になる。このような接し方で成長した子には，非活動性や非意欲的な態度が見られやすい（宮田，1991）。青年の示す無感動，無関心，無為といった無気力傾向は，このような現代の子どもの孤立化傾向を促す環境と密接に関連していることが考えら

れる。

3．実存的フラストレーション

最近の青年には，物質的な豊かさの中の実存的空虚が見られるという。その重要な原因として，青年にとって頑張ることに対する‘意味’が実感できないところを指摘する。例えば，親は子どもに多くのことを要請し，子どもはその期待を感じ取って応えようと頑張るにしても，子どもの心の底には‘自分はこの社会で何をすることを求められているのか’という疑問に答えられないわけである。つまり，張り詰めた使命感に支えられた精神状態を欠いているという（諸富，1997）。

フランクルは，子どもにとって‘意味’が実感させられることの大事さを強調している。すなわち，精神的に荒れていて，情緒的な不安，非人間化，反人倫などノイローゼ的な現代社会の中で，意味を探すことに対する個人がもつ責任を強調している。またフランクルは，退屈や無感動という無気力症状は，実存的なフラストレーションの主な表現であって，その原因は，現代の自然科学がもたらした還元主義的な考え方だという。物質的に豊かさを招いた科学主義のゆえに，現代人は一見恵まれているように見えるが，しかし精神的には必ずしも満足しておらず，実存的空虚感のため心理的な混乱を感じるわけであり，現代の子どもにもその傾向が見え始めたことになる。

このような実存的空虚感をしめす群の根底には‘何をしても面白くない’，‘何もコミットできない’という心理が働いている。さらに，それを分析してみると‘自分は何のために生きているのか’，‘本当の自分は何なのか’という自己存在に対する疑問が存在することである。最近，高校生に，身体的な疲労感と共に漠然としたストレス感，心のむなしさなどを訴える場合が増えているという実証的な結果も提示されている（諸富，1997）。

以上，現代の青年が処した社会文化的な環境における主な特徴は，競争主義，孤立傾向，豊かな現代社会の中の実存的空虚感として整理することが可能であり，これらは青年の示す無気力傾向を考える際に欠かせない側面となる。

B．発達心理学的な論点

青年期は児童期までとは異なる新たな自我が生まれる時期といわれる。そういう意味でエリクソンは，青年期は前段階と不連続性をもつという。児童期まで保った‘自我’とは他人の目から規定されるものであって，青年期にはそのように不変的で連続的な‘自我’に対する疑問を抱くようになり，自分が果たすべき役割を中心にいわゆる自らの自我定義を求める時期に入る。

しかしながら，現代の青年には，受験競争などを理由に，暗黙のうち自己役割に対する検討や自らの自己定義を求めることに対する延期現象が見られる。このような自我確立時期の延期は，やがて競争場面を乗り越えた後，大学生の時期になってアイデンティティ拡散が起こるような現象を招いていると考えられる。最近の青年がしめす無気力傾向はこのような自我探索時期の延期のゆえに，内面的な成熟も遅れるところに関連があると考えられる。

ところが，無気力に陥ると退行をきたすという。一般的に，人間は退行という心理的な機制を通じて，外傷体験以前の状態に回帰することを求めるといわれ，そのような立場から考えると，無気力の青年が示す退却や回避性などの行動は，以前の段階へ回帰したい欲求の表れ，つまり退行的な行動として理解することができる。例えば，無気力をしめす大学生の内面には，彼らにとって急激な変化であった大学環境から，高校時代またはその以前の段階へ回帰したい欲求が隠れていることも考えられる。

無気力は，程度によって分類することができるが，重度の無気力の場合に，無関心，無感動のうえ自室にこもって全くといってよいほど，極端に人間的な触れ合いを一切望まなくなる。無気力状態の人にとって自室は，心理的に母親の胎内のような意味をもつ（稲村，1991）。

そういう観点から考えれば，無気力の青年には母親の胎内から分離・独立する際に感じる不安と似たようなものが内在されていることが推測される。つまり，発達段階に応じた危機を乗り越えられず，母親の胎内のような場所へ逃げて閉じこもることによって，心理的なバランスを取ろうとする様子が見えてくるのである。

特に大学入学初期において，様々な面で自主性が求められる状況は，ある種の障害感が引き起こされることが推測されるため，その不安状態から自分を防衛したいという心理が働く可能性が高い。

このような退行または防衛的な行動は，個人にとって自然に表われるべき欲求の発生を妨げる。例えば，無気力状態の青年が示すアンヘドニア，回避性，消極・受動性（Walters, 1961；笠原，1984）などは，青年の内面から表われるべき意欲，積極性などの肯定的な行動性が妨害された結果と考えられる。

C．精神病理学的な論点

精神病理学において，無気力の問題は不安や憂鬱の次にくるものとして，注目の高のまるところである。

一般的に無気力は憂鬱に似たような主観体験をもつといわれる。しかし，憂鬱は本質的には死のイメージとつながるものであるが，無気力はそうではない。そのため，憂鬱体験の人はその気分が軽くとも精神科医をおとずれることを躊躇しないが，無気力の人が医者やカウンセラーを訪れることは稀である。

一方，無気力は，代表的な精神病である分裂病の経過中にも見られる。そして，大学時期の前後に多発する病気であるというところもあり，大学生に見られる無気力，つまりスチューデント・アパシーが分裂的性格と疑われる場合もある。特に，青年期における分裂病の人は，期待される対人的水準に達してないという特徴があり，一見スチューデント・アパシーの人がしめす退却反応や回避的な態度と同様に考えられがちだからである。しかしながら，スチューデント・アパシーの人が示す退却反応や回避的な態度は日常の全般的なものではなく，選択的であるところで分裂病とは区別される（笠原，1983)。例えば優勝劣敗に過敏であり，予期される敗北，拒絶などの場面からあらかじめ退却する行動パターンで身を守ろうとするところは，むしろ回避的な性格に近い。

スチューデント・アパシーの退却反応を自我親和型ノイローゼとして見ることは，ある程度説得力をもつ。従来のノイローゼなら，不安感や身体的な違和感が強いため，自ら病院やカウンセリングに訪れるわけであるが，スチューデント・アパシーの場合には高い防衛のゆえに自ら治療を求めることがありえない。

退学もせずに留年を繰り返す裏面には，何がやりたいか自分でもわからないという，自分の人生に対するビジョン喪失感が潜められている。やりたいことが分かれば，退学してそちらへ進むが，自分でもわからないため，明確な方向性のある行動ができないのである。近年このような現象は‘アイデンティティ障害’と呼ばれる。

青年は一時期‘自分とは何か’など‘アイデンティティ探求’に思いをこらす。しかし現代の青年は，自分の意志とは関係なく，社会文化的な背景のゆえにその時期が延期されることを経験する。例えば，大学入学後に‘アイデンティティ探索’が始まるとしても，その方向性を持たずに漠然とした混乱を示すだけで，適切に対応しきれない場合が多くなる。

最近では，そのような症状が大学生だけでなく，大学卒業後の若いサラリーマンにも見られるようになり，さらに時期的な拡散が推測される。

このような青年期無気力症候を一種の動機づけ障害として見なすこともある。一般的に動機とは，目標や満足を獲得しようと努める傾向といえよう。動機づけ障害とは，目標を設けることや満足感を得ようとすることに対する意味づけができていないため，新たな場面における動機が低下，または喪失させられることを指す。

そのような，動機の低下した人は，感情の面でも，無感動になったり，興味の範囲が狭くなったり，消極的で自己愛的な傾向を示したりなど，生気が感じられない（宮田，1991)。

一方，無快楽，無感動などの情調的反応は，抑鬱気分を伴うものとして考えられたり，退却症の中に見られる怠学は行為障害を伴うものとして考えられる余地もあり，青年期における無気力症候はある意味で適応障害として理解されることもありうる。しかしながら，彼らの示す無感動，無快楽などの感情や怠学の行為には，ストレス因子がはっきりしておらず，周りの予測を超えた苦痛を感じるような側面も見られないため，適応障害の条件にはならない（高橋　他，1995)。なぜなら，無気力の人に見られる，三無主義や目標・進路喪失などは，彼らにとって自我異質的体験ではなく，自我親和的な体験になるからである。彼らは何をしても快的な体験が稀であるほど，苦しいという感覚も持たないわけである（笠原，1983)。

他に，無気力の人に見られる疎外感（Walters，1961；笠原，1977など）は，境界例の人がしめす空虚感と比較してみる必要がある。空虚感とは，寂しい感情とは対極としてある。寂しい感情には人間関係へのつよい欲求が含まれている反面，空虚感はそもそも人間関係が構成されておらず，他人の心情に共感する能力が欠けたものである（笠原，1983)。無気力の人が，対人関係に感じる疎外感にはこのような共感能力の乏しさが基底に存在すると考えられる。

他人に対する共感能力の乏しい人は，高い自己愛性の持主である場合が多く，病的な自己愛者はアイデンティティ拡散になりやすいといわれる（笠原，1983)。すなわち，無気力の人に高いアイデンティティ拡散が見られる結果は（笠原，1973；馬場，1976；鉄島，1993など)，自己愛性との関連性を推測させるのである。

以上，無気力は精神病理学のさまざまなところから照らして見ることが必要となる。

D．母親の養育態度と無気力

フロイトは，母親は個人にとって最初にして最強の愛情対象であり生涯を通じて比喩のない独自の対象という（馬場，1984）。それだけに母親との間に望ましい関係性を経験したということは，青年にとって極めて重要な意味をもつ。

例えば，攻撃的な行動を示す青年の内面に，男性的で強いアニムス的な母親イメージが位置するという結果からも（山田，1987），青年の性格発達に及ぼす母親の養育態度の影響力が確認できる。最近，次第にアニムス化する母親の態度は，家庭の中で母親の役割が父性原理化していく現象と，父性的倫理観と母性的倫理観における混乱状態をよく反映する（河合，1976）。このようにエロスに欠けたアニムス的な母親の態度は青年がしめす無気力症状にも影響する（山田，1990）。

ユングの‘太母’の概念による‘母親元型’では，アニムスな母親は，普通，アニマの母親に圧倒されるものであり（Samuels，1985），アニムスの母親は場合によって，ある関係の中へ入り込み，その関係を困難にするか不可能にする危険性をもつ（Jung，1947）という。

Kannerの分類によれば，親の子に向いた養育態度は，情緒的適温（optimum emotional climate），マイナスへの偏り（deviation toward minus side），プラスへの偏り（deviation toward plus side），完全欲（perfectionism）に分けられるが，そのうち，完全欲は親の体面を保ちたい親側の願望が含まれたアニムス的な反応と考えられる。親の完全欲的な態度に対して子ども側は無条件降伏，退却，反抗，この三つのうちに反応を示す（牧田，1980）。そのうち，無条件降伏または退却は，子にとって一次的コントロール[2]が欠如させられたことを反映するものであり，無気力の発生に密接に関わる要因と推測される。

E．無気力の青年象

最初，スチューデント・アパシーは，アメリカの大学生に見られ，彼らが示す症状の原因は現実的なものとは関係ないことが特徴であった。すなわち，情緒的な減退，知的な無能力感と結びついた無感情の状態として記述される面は，持続的な失敗や屈辱的な状況に対する心理的防衛反応といわれる。そのため，成功が可能な場合にしても，やり通さずに引き下がるだけでなく，明確な目的をもった行動に身を委ねることを避けようとする。彼らは競争の舞台から降りてしまったような状態で，情緒的な様子は空虚感・絶望感などに表現することができる（Walters，1961）。

一方，日本における青年が示す無気力症状は，学習場面を中心に選択的な退却を示したり，発達段階上の危機や対人関係を回避するところがあれば，強迫的で完璧主義性格の持主であって，優勝劣敗に敏感な反応を示すところもある（笠原，1977）。

このようにアメリカと日本の青年における無気力症状は，成功場面と発達段階上の危機場面から‘回避’するというところに共通点をもつ。

他に，日本の青年は‘管理された予期的な社会化’に表現されるように進学システムに従う特殊な発達的特徴をもつ。したがって，大学生になって示す無気力の相当の部分は，猶予された発達課題，例えばアイデンティティ確立問題と密接に関わってきた。一方，最近の青年にはそのような内面の混乱状態を表に示さない傾向が見られ，いわゆる危機としての平穏状態という新たな症候が見られるといわれる（下山，1997）。

青年の示す無気力を豊かさの中に生まれてきた実存的なフラストレーションと見なす見方もある。現代の物質的な豊かさの裏面には人間的な内面の豊かさが欠けている。すなわち，家庭や近所の人間関係の希薄化は現代人の実存的な空虚に大きな役割を果たしているのである。このような実存的なフラストレーションが近年さらに低年齢化していることは注目されるところである。

Ⅲ．調　　査

A．質問紙調査

1．目　　的

韓国の大学生に見られる意欲低下を日本の無気力傾向からとらえ，両国の傾向を量的に測り，比較することにする。つまり，日本における無気力傾向が韓国においてはどのような結果に表われるのか，比較過程を通して検討したうえ，最近の韓国の大学生に見られる意欲低下について吟味することを目的にする。比較の際に取り扱う要因は，性・学年・兄弟順位・軍隊経験（韓国のみ）にする。他に，青年に内面化された母親のアニムス的な態度が青年期無気力症候に影響すること（山田，1990）を確認する意味で，無気力傾向を推測する説明要因として母親のアニムス的養育態度を設定し，その関係を確認する。

2．方　　法

a．調査時期および対象

調査期間は1997年8月27日から10月17日までであ

り，対象は日・韓の男女大学生736名（日本267名，韓国469名）である。

b．尺　度

本研究における無気力傾向，アニムス的な母親養育態度（以下‘養育態度’という）の中心概念および尺度作成の際に参考にした資料は次の通である。

まず，無気力傾向の中心概念はアンヘドニア，回避，受動，消極性，強迫的完璧性に主な焦点あわせたものであり，尺度作成に際には日本の先行研究（下山，1995 a；下山，1995 b；竹内，1995；笠原，1977など）を参考にした。また，養育態度の場合は，母親だけを取り扱い，特にアニムス的な養育態度に焦点をあわせた。尺度作成の際には，親の養育態度に関わる先行研究（土川，1990；Samuels，1985；山田，1987；Bloom，1985など）を参考にした。

予備調査を経て，本調査では無気力傾向尺度37項目と養育態度尺度13項目を用いたが，因子分析の結果，因子負荷量において.40以上の項目だけを用いることにした。ただし，他の因子との差が.20以内であって，二つの因子に掛かるような項目に関しては分析の際に用いないことにした。結局，最終的な分析の際に用いた項目は無気力傾向尺度24項目と母親養育態度尺度11項目であった。

因子分析の結果を見ると無気力傾向尺度は3因子構造を示した。第一因子は，青年の無関心，無感動，無為の度合いを表わすものであり，‘アンヘドニア’と命名した。第二因子は，強迫的で物事を完璧にしたがる気持ち，勝負に対する拘りの度合いを表わすものであり，‘強迫的完全主義’と命名した。第三因子は，対人場面における回避的で消極的な態

Table 1．無気力傾向項目の因子負荷量

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	α係数
＜アンヘドニア＞				
何ごとも，生き生きと感じられない	.72	−.02	.20	
時間がただ過ぎて行くという感じがする	.69	.06	.19	
自分は一体何を求めているのかわからない	.65	−.16	.31	
いつもああでもないこうでもないと迷っている感じがする	.64	.04	.24	
私はいまの生活があまり面白くない	.64	.11	.12	
まるで同じところをまわって先へ進まないような感じがする	.61	.15	.03	
毎日の生活が単調だと感じる時が多い	.55	.04	.02	.89
将来本当にやりたいことが何なのかわからない	.55	−.22	.25	
私は何らかの目標をもって，そちらに集中するのが難しい	.54	−.03	.21	
近い将来の予定などはっきりさせないまま生活している	.50	−.21	.28	
勉強から何も得られない気がする	.48	−.04	.07	
心から楽しいと感じる時がある＊	.44	.04	.01	
自分でも自分の性格がよくわからなくなる時がある	.44	.07	.00	
前向きに考えることができない	.43	−.01	.23	
＜強迫的な完璧主義＞				
ものごとを完全にするタイプで，完全でなければ意味がないと思う	.07	.74	−.17	
何事もきちんとしていないと気がすまない	.03	.67	−.22	
私は勝ち負けに非常に敏感な方だと思う	−.05	.63	.25	.80
私にはものごとを完全にしなければと思う傾向がある	.05	.62	−.05	
まわりの優秀な人を追い越さねばならないという考えを持っている	−.04	.53	.12	
私は几帳面だと思う	−.02	.49	−.13	
＜回避・消極＞				
人からの批判がとても気になる	.12	.26	.55	
私は人に対して自分の意見をはっきりと主張する＊	.16	−.27	.47	.70
自分の弱みを人に知られたくない	.08	.14	.45	
失敗が予想される場合は前もって回避する傾向がある	.16	−.03	.44	

注）＊は逆転項目

Table 2. 養育態度項目の因子負荷量

項目内容	I	II	α係数
<勝負強調意識>			
私の母は友達をライバルのように考えさせた	.70	.14	.80
母は私を自分の思い通りに成長させようとした	.67	.21	
勝ち負けより人と仲良くすることを重視した*	.57	−.16	
母はものごとを自分の力でできるように陰から支えた*	.52	−.11	
母は将来の成功のために現在の楽しみを抑制させた	.51	.31	
人に負けないように頑張ることをしょっちゅう強調した	.49	.33	
<支配・指示>			
けじめや責任感について母に教えられた	−.16	.59	.69
ほとんど重要な意思決定は母親の思い通になった	.10	.55	
子どもは日常生活全般について母親の指示を受けた	.09	.53	
悪い行為に対して母親は厳しい罰を与えた	.25	.52	
母は私にたいしてしっかりとするように強いた	.05	.49	

注）*は逆転項目

度の度合いを表わすものであり，‘回避・消極’と命名した（Table 1）。

養育態度尺度は，子ども側の認知による測定であって，2因子構造を示した。第一因子は，母親の勝負を強調する意識の度合いを測るものであり，‘勝負強調意識’と命名した。第二因子は，母親の支配・指示的な養育態度の度合いを測るものであり，‘支配・指示’と命名した（Table 2）。

両方とも4件法で評定を求め，無気力傾向が強いほど，また母親の養育態度に対してアニムス的な態度を感じるほど4点，逆の場合は1点を評定するようにした。

3．結　果

調査結果は，SASプログラムを使い，平均値および相関係数を求めた。

a．各尺度の要因別得点差

1)無気力傾向

無気力傾向の平均値は日本（59.52）より，韓国（61.29）の方が有意に（$p<.01$）高かった。日本の場合，無気力傾向において要因ごとに差を示してないが，韓国の場合には学年，性別，軍隊経験において有意な差を示している。性別では女子の方がより高く（$p<.5$），学年別には二年生が最も高い（$p<.01$）。また，韓国の場合は，軍隊経験有無によって有意な（$p<.01$）差を示し，軍隊経験のある人の方が，経験のない人より高い得点を示した。

2)養育態度

養育態度も日本（25.61）より，韓国（28.62）の方が有意に（$p<.001$）高い。ところが，日本の場合，性による差が示され，女子（26.86）の方が，男子（25.20）より有意（$p<.01$）に高かった。韓国の場合は，兄弟順位において有意な差（$p<.05$）を示し，一人っ子が最も高かった。また，軍隊経験有無による差（$p<.05$）があり，経験のない人の方がより高かった（Table 3）。

b．要因間相互作用

1)無気力傾向

日本は‘兄弟順位’と‘性’との間に相互作用効果があり（$p<.05$），女子で一人っ子が最も高い無気力傾向を示した。それに対して，韓国は‘学年’と‘性’の間に相互作用効果があり（$p<.01$），女子で二年生が最も高い無気力傾向を示した。

2)養育態度

日本は‘兄弟数’と‘兄弟順位’の間に有意な相互作用効果（$p<001$）があり，四人兄弟の中に第一子が最も高かった。韓国では要因間に相互作用効果は見られなかった。

c．下位要因間相関

無気力傾向の三つの下位要因と養育態度の二つの下位要因との相関関係を検討した結果，日本の場合，無気力傾向の‘アンヘドニア’が，養育態度の‘支配・指示’と有意な相関を示した（$p<.05$）。また，無気力傾向の‘回避・消極’も養育態度の‘支配・指示’と相関を示した（$p<.05$）。

性別では，女子の場合，無気力傾向の‘強迫的な

Table 3. 無気力傾向と養育態度の要因別平均値および有意差

要因	水準	日本（N＝267）					韓国（N＝469）				
		頻度	無気力傾向		養育態度		頻度	無気力傾向		養育態度	
			M	F	M	F		M	F	M	F
性	男	201	55.99	2.37	25.20	7.06	170	60.01	5.62	27.66	15.07
	女	66	58.14		26.86	**	299	62.01	*	29.17	
学年	1	85	59.83	0.56	25.46	0.40	220	61.03	5.17	28.75	0.22
	2	159	59.67		25.57		201	62.47	**	28.54	
	3	9	58.00		26.11		22	59.82		26.11	
	4	14	57.00		26.79		26	55.62		26.79	
兄弟順位	一人っ子	26	59.69	0.31	25.96	0.48	20	61.30	0.67	30.95	2.91
	一番目	131	59.98		25.43		230	61.17		28.61	*
	二番目	91	59.02		25.95		153	61.99		28.69	
	三番目以上	19	58.58		24.84		66	60.30		27.82	
軍隊	経ていない	・	・	・	・	・	133	61.16	9.93	27.95	3.93
	経ている	・	・		・		37	55.89	**	26.62	*

注）＊ p＜.05　＊＊ p＜.01

完全主義’が養育態度の‘勝負強調意識’および‘支配・指示’と有意な相関を示した。また，‘回避・消極’が養育態度の‘支配・指示’と相関を示した。

男子の場合は，無気力の‘アンヘドニア’と養育態度の‘支配・指示’に有意な（p＜.01）相関があった。

学年別では一年生の‘アンヘドニア’，‘回避・消極’が養育態度の‘支配・指示’に相関（p＜.01）があった。

一方，韓国の場合は，無気力傾向の‘アンヘドニア’，‘回避・消極’が，養育態度の‘支配・指示’と有意な相関があった。性別では，女子大学生のみ無気力傾向の‘回避・消極’が，養育態度の‘支配・指示’と相関（p＜.05）を示した。

また，学年別では二年生のみ，無気力傾向の‘アンヘドニア’および‘回避・消極’が，養育態度の‘支配・指示’と相関を示した。兄弟順位においては三番目以上である人の‘アンヘドニア’および‘回避・消極’と養育態度の‘支配・指示’とが相

Table 4. 無気力傾向と養育態度の相関係数

要因		水準	変数	アンヘドニア	強迫・完璧	回避・消極
日本	性	男	勝負強調	.01	.04	.05
			支配・指示	.20**	.02	.12
		女	勝負強調	.24	.33**	.15
			支配・指示	−.09	.39**	.25*
	学年	一年	勝負強調	.15	.21	.03
			支配・指示	.29**	.14	.32**
韓国	性	女	勝負強調	−.24	.07	.06
			支配・指示	.10	.10	.12*
	学年	二年	勝負強調	.05	−.00	.00
			支配・指示	.14*	.04	.19**
	兄弟順位	三番目以上	勝負強調	.09	.02	.08
			支配・指示	.25*	.08	.37**

注）＊ p＜.05　＊＊ p＜.01

関を示した（Table 4）。

B．面接調査

1．目　的

本調査では質問紙調査で得られた両国の結果を吟味したうえで，韓国の大学生のうち無気力傾向の最も高い結果を示したものを対象に面接を行なう。このような過程で得られたデータを通して，無気力傾向の高い韓国大学生の結果が，最近韓国で見られる意欲低下にどう位置づけられるのかを吟味するとともに，日本に見られる無気力傾向との間にどのような質的な差があるのかについて検討することを目的とする。

2．方　法

a．調査時期および対象

調査期間は1997年11月1日から11月23日までである。対象は質問紙調査の際に記入してもらった面接意思を参考に無気力得点がより高い男子2名，女子3名を選択した。そのうち最も高い無気力傾向得点を示した者は，82点であり，最も低い無気力傾向得点を示した者は73点であった。韓国の平均値は61.29である。

b．面接の着目点

面接形態は，半構造的な面接を用いた。まず，無気力傾向に対する本人の知覚レベルを探りながら，大学生活に対する意味付けおよび現在の対人関係，家族関係の現状を参考にして，彼らにおける無気力傾向や反応をより明確化することにした。母親との関係性については，質問紙調査から得られた結果を参考して，アニムス的な養育態度と無気力との関連性について実証的なデータを得ることに重点をおいた。

3．面接で得られた主な結果

面接者に関する基本的な情報（性別，学年）および得点はTable 5の通りである。面接者5人が示した共通点は次のように提示することが可能であった。第一に，現在の大学生活は高校まで内面的に抱いた大学イメージとかなり隔たりがある。第二に，大学環境に対する二次的なコントロールが取れない。すなわち，高校までの受動的な生活から大学の自主的生活パターンへ転換することに難しさを感じている。第三に，保障されない不確実な将来に対する不安感が存在し自信の欠如が見られる。第四は，大学へ入学した意味に，‘社会から無視されないために’，または，‘幅広い経験のために’という単純で，具体化された目的意識に欠けた回答が見られる。例えば‘就職’することを目標にする場合においても，その過程や計画のところでは具体性をもたない。

Table 5．面接対象者に対する基本情報

対象者		A	B	C	D	E
性別		女	女	女	男	男
学年		1	2	1	1	1
無気力	アンヘドニア	44	52	47	45	48
	強迫・完璧	18	18	17	15	20
	回避・受動	13	7	13	13	14
	総得点	75	77	77	73	82
養育態度	勝負強調	16	15	13	14	13
	支配・指示	19	15	15	11	17
	総得点	35	30	28	25	20

第五に，対人関係スタイルにおいて，内省的で受動・消極的な特性をもつ。集団への持続的な関わりをもたないか友人関係の幅が狭い。

第六に，母親との関わりに関しては，面接対象者である五人のうち四人において葛藤的なテーマが存在する事が確認された。過剰な支配または過剰な干渉を示す母親との葛藤（Aさん）があれば，両親の間に存在する葛藤的な関係性のために母親と葛藤が派生された場合（Bさん）がある。清潔強迫観念をもつ母親と硬い関わりが見られる場合（Cさん）があり，母親の過剰な期待感のために生じる高い負担感を感じる（Dさん）場合もある。特に，過剰な支配，過剰な干渉を示すため母親との間に葛藤を感じるAさんの場合は，入学の時，専門分野の選択の際に母親の強い介入があっただけでなく，日常における些細なところにまでに支配的な態度を示すケースであった。無気力傾向に母親の支配・指示的な態度が関連するという質問紙調査結果に当てはまる典型的な例になると考えられる。

以上，五人の面接結果を要約すると，大学へ通っていることに対する意味づけが不明確な状況，高校までとは異なる大学システムに対する戸惑い，将来に対する不安感が見られることがわかる。対人関係の幅が狭く，受動的な性格の持主であり，人との付き合い場面に持続的な関わりを持てない。母親との関係では，ある種の葛藤を抱いて母親と直接ぶつかる者もあれば，第三者が媒介する二次的な葛藤も存在する。

Ⅳ．考　　察

質問紙調査の結果，韓国の方が日本より高い無気力得点を示したことから，本研究で扱ったアンヘドニア，強迫的完璧主義，回避・消極という変数を含む無気力傾向に限っては，韓国の方が日本より高いレベルに至っていることが確認された。

日本の無気力傾向は要因による差を示してないのに対して，韓国の場合には学年，性別，軍隊経験によって有意な差を示すことから，韓国の大学生における無気力傾向は特定の要因によって異なるという特徴をもつことがわかる。ただ，日本の場合，兄弟順位と性による相互作用が見られ，一人っ子の女子の方が最も高い無気力傾向を示したのは，現代の青年の無気力は，少子化とも関連して生じる問題として推測する可能性を高める。

韓国は，女子の方により高い無気力傾向が示され，いままで無気力傾向を男子大学生を中心にとらえた見解（下山，Walters，笠原など）に対立的な示唆を与えている。特に，二元分散分析結果，性と学年による相互作用効果が見られ，特に女子二年生の方に注目する必要があった。

韓国において注目されるもう一つの側面は，軍隊経験による差であって，軍隊経験のある人の方がより低い無気力傾向を示したことから，軍隊経験によるある種の肯定的な変化が予測された。軍隊は，徹底的な統制集団である一方，現代の孤立化傾向とは逆の特性が経験できる集団である。すなわち，統制性の強い集団生活の経験は，現代における家族中心の断絶的文化では期待することのできない肯定的な態度を引き起こす可能性が推測される。

無気力傾向と養育態度の相関関係を見れば，日本の場合，女子大学生の強迫的な完璧主義や回避・消極性が支配・指示的な母親の養育態度から影響をうけることが推測された。特に強迫的な完璧主義には母親の勝負強調意識からも影響をうけた。それに対して，日本の男子大学生の場合は，アンヘドニアに母親の支配・指示的な養育態度が影響することであった。

また，学年別には，一年生のアンヘドニアの傾向および回避・消極性に支配・指示的な母親の養育態度が影響することが予測された。すなわち，大学入学直後に表わすアンヘドニア傾向および回避・消極的な傾向に高校までの母親の過剰な支配，過剰に指示的な養育態度が影響を与えた可能性が推測される。

このように，大学生活においての最初一年間は，ある意味で急激な文化的変化を経験する時期であると思われるが，高校まで母親を中心にする支配・指示的な養育態度の範囲で動いてきた生活パターンから，自律性や自主性が要求される生活へ移行する際の困難が，アンヘドニア的な側面および回避・消極性のような退行的態度として表われる可能性が考えられる。例えば，現代の青年が置かれている学校を中心にした競争場面では，母親のアニムス的過剰の支配や指示的な養育態度に抵抗感を感じなくなっている。しかし，そのような経験は，大学のような自律性や自主性の求められる場面に対応する際には困難を感じさせる可能性が考えられる。

一方，韓国において，アンヘドニアや回避・消極的な傾向と母親のアニムス的な支配・指示的な態度との関連は，二年生において最も高く見られた。したがって，韓国の方は，自律性や自主性が求められる大学場面に対応する際に感じる困難が，母親のアニムス的な養育態度と関連する時期が，日本より後になることが推測される。

また，韓国の無気力傾向と養育態度の間の相関関係に基づいた結果として，女子における回避・消極的な傾向に母親の支配・指示的な態度が影響することが予測された。面接調査内容を参考にすれば，女子面接者三人のうち二人は，母親に対して否定的な認識を持っていた（Aさん，Cさん）。二人は，母親側が自己中心的な考え方をそのまま子どもに取り込ませようとしたあまりに，一次的なコントロルの経験が少ないように考えられた。そのために自分は母親の前で無力な存在という自己イメージを抱いているような表現も見られる。

人間は自分が処した物理的，心理的環境を自分の力でコントーロルしたい欲求をもつ。一般的な親を中心にした身近な人との関わりの中で，一次的なコントロール可能性を経験することは子どもにとって重要な意味をもつ。しかし，成長するにつれて常に一次的なコントロール可能性が通用するわけではないので，その場合には二次的なコントロール可能性，つまり，環境に自分を合せる力がいる。そのような二次的なコントロール可能性が生じるためには，適切に一次的なコントロール可能性の経験が必要であると考えられる。

もし，両方とも可能性が見られない場合に，人間は無気力へ進むと推論される（宮田，1991）ため，コントロール可能性の見えない状況から，自尊心をまもるために人と関わる場面を避けたり，引きこもったりなどの症状が表われるのである。女子大学生三人の面接に示されたことから，内省的で，集団への関わりをもたないだけでなく，友人関係が狭く，消極的な対人関係スタイルをもつなど無気力傾向に関わる側面は，母親との関わりにおけるコントロール可能性の挫折経験に起因する可能性

が高い。

このような，母親の態度には当然のことながら子どもに自分の人生への意味付けを感じさせるような関わりを期待することは難しい。したがって，子ども側にいわゆる実存的なフラストレーションが助長される一つの条件になる可能性も考えられる。

以上，日本の女子大学生の強迫的な完璧主義が母親の勝負強調意識と相関が見られた点以外は，母親の養育態度のうち主に支配・指示的な態度が無気力傾向に影響を与えていることが確認された。

つまり，母親が青年に接する際に勝負を強調することは，青年の無気力傾向にそれほど意味を持たないが，自律欲求に反する母親の‘支配・指示’的な態度は，特に‘アンヘドニア’および‘回避・消極’というマイナス的な状態や行動を引き起こす可能性があることが示唆された。

V．結　論

本研究は，日本の大学生に見られる無気力傾向を拠点に，最近韓国の大学生に見られる意欲低下の実体に近づくことを目的にした。その結果，本研究で取扱った無気力傾向の概念では，日本より韓国の大学生の方が高い無気力傾向を示した。

質問紙調査の結果，アメリカ（Walters，1961），日本（笠原，1977）に共通した‘回避性’の他に，韓国大学生の無気力傾向のうちアンヘドニアおよび消極的な側面には，母親のアニムス的な養育態度が影響を与えていた。

特に日・韓の女子大学生において‘回避・消極’に‘指示・支配’的な母親の養育態度が関連するところが共通点であった。このような結果は，韓国の場合，面接調査でさらに支持された。具体的な面接内容を参考にすると，コントロール可能性が感じれる経験をあまり与えない支配的な母親態度が，女子大学生の回避・受動性を生じさせる要因に作用することがわかった。このような側面は，山田（1990）の提示したところによると，エロスに欠けたアニムス的な母親の態度が青年の無気力傾向を引き起こす可能性を示唆した内容を支持する。このように，韓国の大学生に見られる無気力傾向は，その背景にあるものとして母親のアニムス的な養育態度の影響力が確認された。

ところで，養育態度のうち，勝負を強調することは，両国とも青年の無気力傾向に意味のある関連を示さず，支配・指示的な態度のみ無気力傾向に関連を示した。このような結果から勝負を強調することは，青年の心理に否定的な影響を与えないのに対して，支配・指示的な態度，あるいはコントロールするような接し方は青年に負的な影響を与える要因になることが確認された。

また，面接の内容から，韓国の大学生には，大学に入学することへの意味づけが不明瞭であることをはじめとして，将来に対する不安，対人関係における困難がみられた。

そして，このような状況の背後には，現社会システムでは避けられない激しい受験競争[3]の問題が存在することがわかった。つまり，彼らのしめす無気力傾向は，日本で見られるような，いわば‘廻り道’（笠原，1977）のような青年期延長現象の結果によるものとしては考えられない。また，豊かさの中で表われる実存的なフラストレーションのような特徴も現実のレベルでは見られないのである。

ただし，男女とも入学に対する目標意識の不明瞭性は，動機水準の低下につながるという側面が見られ，韓国の大学生における無気力傾向は宮田（1991）のいう動機低下に高く関連する可能性が示唆される。これらの特徴は，韓国の大学生に見られる意欲の低下現象を無気力傾向に位置づける際に，重要な手かがりとなる。

したがって，質問紙調査データと無気力傾向の最も高かった五人の面接結果を参考にしたうえ，現在の韓国の大学生に見られる意欲低下は次のように整理することが可能になる。第一に，受験競争を背景にして生じる進学意味づけの不明瞭性と，それに伴う動機低下やアイデンティティ混乱を特徴にする無気力傾向と位置づけることが可能になる。第二に，そのような傾向には，母親の養育態度から影響される，自律性や自主性における困難が関連する。第三に，男子における意欲低下は，軍隊という特殊な集団生活の経験の有無によって換わる可能性がある。

最後に本研究では，説明変数としてアニムス的な母親養育態度を設定し，それと無気力傾向との関連性が量的に検証されるという新たな結果が示された。しかしながら，母親のアニムス的な養育態度とは，青年期無気力傾向を説明する極一部の側面である。したがって，今後韓国の無気力傾向に関する研究ではより包括的な説明要因を取り入れた尺度を作成し，新たな研究を重ねていくことが要求される。

（指導教官　下山晴彦助教授）

注

1）本稿は，1998年２月に提出した修士論文を加筆，修正した内容である。

2）無気力理論において，コントロールには，環境を自分の方に合せようとする意味でのコントロール可能性，すなわち一次的コントロールと，自分が環境に適応していくことによるコントロール可能性，すなわち二次的コントロールがある（Rothbaum, weisz & Snyder, 1982)。宮田，前掲書（1991)，p.147

3）受験競争率：1979年度3.72：１，1997年度4.34：１，1999年度4.61：１，2000年度5.03：１であり，持続的な上昇勢を示す（教育統計年報資料)。

引用文献

稲村　博　1991　アパシーの現状と取り組み方　教育心理　39，pp96-99

笠原　嘉　1973現代の神経症性アパシーについて　臨床精神医学　2，pp153-162

笠原　嘉　1977青年期（精神病理学から）中公新書

笠原　嘉　1983　無気力の精神病理学（精神の危機ー精神の科学３）岩波書店

笠原　嘉　1984　アパシー・シンドロム　岩波書店

河合隼雄　1976　母性社会日本の病理　中央公論社

Samuels. A.　1985　Jung and The Post-Jungians 村本　詔司，村本　邦子訳　1990　ユングとポスト-ユンギアン，創元社

下山晴彦　1995(a)　男子大学生の無気力の研究　教育心理学研究，43，２，pp145-155

下山晴彦　1995(b)　スチュデント・アパシーの下位分類の研究　東京大学大学院教育科研究科紀要35，pp159-185

下山晴彦　1997　臨床心理学研究の理論と実際-スチューデント・アパシー研究を例として-，東京大学出版部

高橋三郎ほか　1995 DSM-Ⅳ　精神疾患の分類と診断の手引き　医学書院

竹内知夫　1995　心の病気　星和書店

土川隆史編　1990　スチュデント・アパシー（土川隆史　スチュデント・アパシーの輪郭，岩村聡　スチュデント・アパシーと学校制度，山田和夫　家族関係の中でのスチュデント・アパシー）同朋舎

鉄島清毅　1993　大学生のアパシー　傾向に関する研究　教育心理学研究41，pp200-208

Bloom, B.L 1985 A Factor Analysis Of Self-Report Measures Of Family Functioning, Family Process 24, 225-239

牧田清志　1980　児童精神医学Ⅰ　現代精神医学大系17Ａ中山書店

馬場謙一　1976　自我同一性の形成と危機ーエリクソンの青年期論をめぐってー（笠原偏　青年期の精神病理Ⅰ，至文堂，pp111-128)

馬場謙一　他　編　1984　母親の深層　有斐閣.

諸富洋彦　1997　フランクル心理学入門ーどんな時にも人生には意味がある　コスモス・ライブラリ

宮田加久子　1991　無気力のメカニズムーその予防と克服のためにー　精神書房

山田和夫　1987　今日の家族の役割について　心の健康 Vol.2 No.1 pp26-31

Jung, E.　1947　Ein Beitrag Zum Problem Des Animus. 笠原嘉＆吉本千鶴子 1986 内なる異性（アニムスとアニマ）海鳴社

Walters, P.A.Jr. 1961 Student Apathy in 「Emotional Problems of the Student」 ed by Blaine, G.B.Jr. & McArtur, C.C. Appleton century Crofts, New York.（笠原　嘉，岡本重慶訳　学生のアパシー「石井完一郎他監訳1975学生の情緒問題　pp106-120　文光堂」.